

医療経済や政策から見た薬局の今後

座長

日本薬剤師会会長

山本信夫

福岡県薬剤師会会長

原口亨

日本は1961年開始の国民皆保険制度により世界最高レベルの平均寿命と保健医療水準を実現している。この国民皆保険制度は、①国民全員を公的医療保険で保障②フリーアクセス③安い医療費で高度な医療④社会保険方式+公費による運営を基本とし、現役世代のみならず、全ての世代に対し安心を提供している。

医薬分業の進展に伴い、保険薬局は地域住民にとって身近なものとなった。政策的な背景によりスタートしたとも言われる当初の分業から数十年経ち、本質的な機能や役割による患者から評価される分業に向けた議論がなされる中で、薬剤師、薬局が評価されている一方、批判も存在している。あわせて、薬剤師、薬局には薬学的知見に基づく医薬品の適正使用に基づいた医療経済的な貢献も求められている。

本分科会では、医療経済や政策から見た薬局の現状と将来像について議論を進める予定である。まず、社会保険診療報酬支払基金の神田裕二理事長に、「患者のための薬局ビジョン」を取りまとめた当時の医薬食品局長としての思いや、その後の薬剤師・薬局に対する評価に関し私見も交えて講演いただく。県立広島大学大学院経営管理研究科の遠藤邦夫教授には、シンクタンクにおいて医薬分業や薬局関係に数多く携わってきた視点に基づき、これからの薬局について講演いただく。横浜市立大学医学群健康社会医学ユニットの五十嵐中准教授からは、薬剤師や薬局の活動について費用対効果の観点も交えた評価と期待について講演いただく。

最後に日本経済大学大学院経営学研究科の赤瀬朋秀教授から、経営学的視点に基づく薬局の戦略や、対人業務に基づく評価につながる実践について講演いただく。

これらの講演をいただいた上で、シンポジストの方々と討論し、今後の薬剤師と薬局の可能性を探りたい。

(原口亨)

がん化学療法における薬剤師への期待

座長

日本薬剤師会専務理事

磯部総一郎

福岡県薬剤師会専務理事

有吉俊二

厚生労働省は2019年、主な死因別に見た死亡率(人口10万人対)の年次推移を公表している。死亡率1位の死因はこの40年間、悪性新生物(癌)である。この間、癌治療は入院療法から外来療法へ移行してきている。多職種連携、専門医療機関との連携、薬局薬剤師と病院薬剤師との連携など、チーム医療の重要性が注目されている。癌治療に特化した専門医療機関連携薬局の認定が、本年8月から始まった。本分科会では薬局薬剤師と病院薬剤師の連携を通じて、われわれが癌化学療法に責任を持つ有用性を提示する。

基調講演は「国立がん研究センターから見る薬剤師・薬局の状況と期待するもの(病院と研究所の企画経営を統括する立場から)」と題し、国立がん研究センターの中山智紀理事長特任補佐から、最先端の癌研究と癌医療を見渡せる立場から、薬剤師・薬局のあり

方、薬局薬剤師と病院薬剤師に効果的な連携と、薬剤師の専門性や教育のあり方について講演をいただく。

次に、「病院薬剤師・薬局薬剤師・がん治療関連学会への期待」と題し、福岡大学薬学部の神村英利教授から、連携充実加算(病院薬剤師)、特定薬剤指導管理加算2(薬局薬剤師)の業務内容の連携、学会が提案する認定制度について講演をいただく。

さらに病院薬剤師の立場から、西会昭和病院薬剤部の川崎美紀薬剤部長から、「質の高い外来がん化学療法を目指した連携体制への取り組み」のテーマで、病院や学会等が開催する、病院薬剤師と薬局薬剤師の連携に必要な研修会の重要性について講演をいただく。最後に薬局薬剤師の立場から、長野県薬剤師会会営薬局の村田稔弥主任から「外来がん化学療法における患者サポートおよび薬業連携の充実を目指して～薬局薬剤師の立場から～」のテーマで、癌患者サポート体制および病院との連携構築の報告を講演いただく。

最後に参加の皆様を含め、シンポジストの方々と活発な議論をしたい。

(有吉俊二)

多様化する在宅業務

座長

日本薬剤師会専務理事

荻野構一

豊橋市薬剤師会副会長

神谷政幸

間もなく2025年を迎える。地域包括ケアシステムの構築には、高齢者の生活を地域で支えるだけでなく、小児在宅医療についても対応可能なシステムの構築が求められるようになってきた。すなわち、薬剤師による在宅医療への関わりは、医療的ケア児から緩和ケア・ターミナルケアまでと様々であり、そのニーズは多様化してきている。

本分科会では、地域包括ケアシステムの実現に向け薬剤師の在宅訪問による服薬管理の必要性とさらなる取り組みの方向性を議論したい。

基調講演として、厚生労働省医薬・生活衛生局総務課薬局・販売制度企画室の南亮介室長補佐からは、地域包括ケアや多職種連携の観点から、薬剤師は地域住民の支え手として、また地域の専門職として何ができるのか、在宅医療において薬剤師へ期待することについて講演いただく。

続いて、3人のシンポジストに発言いただく。

小児在宅医療においては、患者のラ

イフステージの切れ目をつなぐ継続的な薬学的ケアが必要である。ココカラファイン薬局店頭の川名三知代氏からは、小児在宅医療における薬剤師の役割について、専門医療機関の小児科医が主治医のまま在宅移行する超重症児たちの薬物療法を、専門医療機関と薬局の直接の連携で支えてきた経験からお話しいただく。

超高齢社会においては、ますます増加する心不全患者が、できるだけ入院することなく安心して地域で暮らせるような社会システムの構築が急がれる。千葉大学大学院薬学研究院の高野博之教授からは、心不全の在宅医療を実践できる薬剤師の育成に向けた取り組みについて紹介いただく。

褥瘡を有する高齢者は在宅や施設に見られ、病院から持ち帰ることもしばしば見られる。そのため褥瘡は地域連携や多職種連携が必要であり、経過観察を含めた薬剤師の関わりが医師や看護師から求められている。愛生館小林記念病院の古田勝経氏からは、在宅褥瘡の外用薬治療と薬剤師視点の重要性についてお話しいただく。

最後の討論では、多様化する在宅業務における薬剤師の可能性を深化させる。

(神谷政幸)

薬剤耐性(AMR)と薬剤師の役割

座長

日本薬剤師会専務理事

橋場元

小倉記念病院薬剤部部長

入江利行

抗菌薬の不適切な使用により、薬剤耐性菌が世界的に増加し、新たな抗菌薬の開発も減少していることが国際的に大きな問題となっている。日本でも、2016年4月に薬剤耐性(以下AMR)対策アクションプランが公表され、薬剤耐性菌の増加を防ぐために、①普及啓発・教育②動向調査・監視③感染予防・管理④抗微生物剤の適正使用⑤研究開発・創薬⑥国際協力——の六つの分野で目標と具体的な取り組みが示された。

このアクションプランはワンヘルス・アプローチの視野に立ち、医療、動物、食品等の専門領域を超えた専門家のネットワークを形成することも含んでいる。その中でも、抗微生物薬の適正使用とその啓発については、AMR対策として医療に関わるすべての者が対応すべき問題である。そして、薬剤師の使命は「薬剤の適正使用の推進」

であることから、この問題に対して中心的に関与すべき職種は薬剤師であるとも言える。

本分科会では、まず、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科統合臨床感染症学分野の具芳明教授にAMR対策の基本と、薬剤師に望まれることについて講演いただく。京都薬科大学臨床薬理学分野の村木優一教授にはAMR対策における保険薬局薬剤師の協働について講演いただく。九州大学病院薬剤部/グローバル感染症センターの中島貴史氏には、自施設の抗菌薬適正使用支援チーム(AST)の専従者としての活動について講演いただく。さくら薬局の大黒幸恵氏には小児に関わる薬局薬剤師として、これまでに実施したAMR啓発活動と市民対象のAMR教育活動について講演いただく。

中津市立中津市民病院薬剤科の上ノ段友里主任には地域で取り組むAMR対策と地域住民への啓発活動について講演いただく。これらの方々の講演から、AMR対策の必要性と共に薬剤師としての役割を理解していただけると幸いです。

(入江利行)



超簡単!!

論文作成ガイド ~『研究』しよう~ 第2版

〔著者〕山浦克典 鈴木匡 亀井美和子 熊谷雄治
前田実花 伊勢雄也 山本紘司 飯嶋久志

A5判/188頁
定価2,200円+税

論文作成をイチから始める初心者にも最適なガイドブックの改訂版! 「研究テーマの選び方」、「文献の探し方」、「研究データの集め方」、「研究の発表の仕方」など論文作成に関する研究のはじめから終わりまでの流れや進め方、留意事項などをわかりやすく解説しています。

【改訂のポイント】

- 最新の法規定など研究環境の変化に対応して内容をアップデート
- 新たによくある疑問点を「Q&A」として各章の終わりに掲載

詳細はこちら▶



薬事日報社 書籍のご注文は、オンラインショップ(<https://yakuji-shop.jp/>)または、書籍注文FAX03-3866-8408まで。

当ファイルの著作権は(株)薬事日報社またはコンテンツ提供者に帰属します。当ファイル(印刷物含む)の利用は私的利用の範囲内に限られ、それ以外の無断複製・無断転載・無断引用はご遠慮ください。当ファイル(印刷物含む)を社内資料、営業資料などでご利用される場合はご相談ください。

株式会社薬事日報社 TEL:03-3862-2141 shinbun@yakuji.co.jp <http://www.yakuji.co.jp/>